国立国語研究所学術情報リポジトリ

世界の言語研究所（9）　アイオワ大学　FLARE プログラム（アメリカ合衆国）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2077

世界の言語研究所（9）

アイオワ大学　FLARE プログラム（アメリカ合衆国）

西郡　仁朗（東京都立大学）

1．はじめに

日本国内の大学院では，日本語教育者のためのマスターコースが相次いで開設されている。従来のように言語研究者養成と併存する形ではなく，日本語教育の高度な専門家養成が目的である。早稲田大学日本語研究教育センターでも2001年度から日本語教育者のための大規模な修士課程が始まるという。

筆者は昨年アメリカで研修する機会を得たが，アメリカで高度な専門家と認められるためには，やはり Ph. D. が必要だ。周知の通り，現在のアメリカ社会では研究・教育プロジェクトの指導的立場に立つための「ライセンス」として Ph. D. が重要視されている。外国語教育や異文化間コミュニケーションの分野も同様で，いくつかの大学でドクターコースが設立され始めている。

本稿では，その中の一つ，アイオワ大学 FLARE プログラム（Foreign Language Acquisition, Research, and Education）を紹介する。FLARE プログラムは第二言語習得（以下 SLA: Second Language Acquisition）の専門家を養成するためのものであり，関連諸分野との学際的コースとして昨年設立され，アイオワ大学が全学的に力を入れている。

2．アイオワ大学・アイオワシティー

アイオワ州はアメリカ中西部に位置し，草原・丘陵・耕作地が果てしなく続いている。そうした田園的な土地には不似合いな風情でぽっかり浮かんでいるのがアイオワシティーである。周囲は大自然だが，一歩町に足を踏み入れると，回りとは全く異なる先進性，文化的な豊かさを感じた。その理由はこの町がアイオワ大学そのものだからであろう。アイオワ大学の中でも全米的に知られているのは医学部であり，専門別・患者別（小児病院・退役軍人病院など）の病院群がそこかしこに建っている。医学と関連諸分野の学際的活動も盛んで言語病理学（Speech Pathology）の草分けの一つとして記憶している方も多いだろう。リベラルアーツなどの教育も充実しているが，こうしたアカデミックな雰囲気は，教育熱心なドイツ系の人々が同州に多いことと無縁ではないらしい。

アイオワシティーの人口は約６万３千人だが，そのほとんどが教員・医師・学生をはじめとする大学・大学病院の関係者と，彼らの生活を支える店舗などの人々であるという。

3．FLARE の設立背景・研究分野

FLARE はアイオワ大学全体の International Program という位置付けであり，既存の学科から

は独立している。母体となったのは College of Liberal Arts and Sciences と College of Education で，SLA 専門のドクターコース設立に対する社会的な要請，研究分野としての独立を求める声などを背景に10年以上前に計画された。その後，各言語のコーディネータ役を兼ねた気鋭の研究・教育者が集められ準備が進んだが，さまざまな曲折を経たようだ。正式にスタートしたのは2000年８月である。この間プログラム始動の中心になったのは，フランス語・イタリア語・英語の教育者で心理言語学者としても知られている L. Kathy Heilenman 氏である。

SLA は第二言語・外国語の学習過程を学際的な視点から研究する分野で，言語学・心理学・心理言語学・社会学・社会言語学・談話分析・会話分析・教育学を背景とする実践的なものである。FLARE では，SLA の研究分野を，1. SLA 言語学（SLA-Linguistics），2. SLA プログラム策定（SLA-Programmatic），3. SLA 教育工学（SLA-Technology）の三つに分けている。後二者が強調されていることで，FLARE がいかに実践的な研究者・教育者・指導者の養成を目指しているかが伺える。

４．スタッフ・設備

FLARE のスタッフは先述の Heilenman 氏に加え，“ACTFL guideline” を作ったことで知られる Judith Liskin-Gasparro 氏，教育工学の Sue K. Otto 氏，若くして中国語教師連盟の会長を務める Chuanren Ke 氏，日本語の畑佐由紀子氏などで錚々たる顔ぶれである。

筆者が FLARE を訪問したのは，2000年10月で，まさにこのプログラムが立ち上がったところであった。内部のコロキウムが開かれており，幸いなことに James P. Pusack 氏の講演と議論に参加することができた。Pusack 氏はドイツ語教育が専門だが，教育工学者としても知られている。“Practical Utopias: Language Learning in the Digital Future” という演題で，デジタル技術によって学習者が時間と場所に束縛されることなく，いつでもどこでもモニター内のデジタル化された教師（彼は「クローン」と呼んでいた）と対面して学習していくのが中心になるであろうこと，タスク・シラバスがデジタルメディアによる教育においても重要であり，文法等の学習は必要な時に即座に参照できれば済むこと，教科書は不要であることなどが強調されていた。

アイオワ大学の語学系の教室はほとんどプロジェクター設備がついており，インターネット接続可能，授業で WEB も利用できる。また，FLARE はランゲージ・メディア・センターと連携しており（次ページ写真参照。前述 Otto 氏がセンター長を務めている），こうした優れた設備が教育工学的研究の実践の場として活用されている。

５．おわりに

FLARE は始動したばかりであり，はっきりとして成果が現れるのは５年後，10年後ということになるだろう。

アメリカの SLA 研究を見ると，英語を母語とする学習者がフランス語・ドイツ語などの同語族の（cognate）言語を学習・習得する過程を見たものが多い。上記 Pusack 氏の講演でも，教科書や文法よりも，タスクのもとでのコミュニカティブな学習が強調されていたが，私見を述べれば，

これは学習に関してかなり楽観的な見方であり，例えば英語母語話者が，日本語や中国語など語族が異なり類縁関係のない言語を学習する際，初級から同じ方法がとれるかどうかは疑問である。

今後の FLARE での研究で，多方面での成果があがること，特にCognateではない言語についての SLA 研究が進展することを期待する。

FLARE 視察の機会を作って下さった畑佐由紀子氏，畑佐一味氏，内部コロキウムへの参加を快諾して下さった Sue K. Otto 氏，James, P. Pusack 氏に感謝します。

アイオワ大学 FLARE プログラムに関する情報は以下の URL で入手可能です。

http://www.uiowa.edu/~intl/links/flare/flarehome.html

写真　アイオワ大学ランゲージ・メディア・センター

FLARE プログラムの SLA 教育工学の実践の場となる。100台ほどの端末があり，Flash や ShockWave, HyperCard, SuperCard などで制作された自学自習教材が常時利用可能である（開放時間は平日朝８時から夜８時まで）。